



はじめまして。スクールカウンセラーの宮崎育子と申します。今年度4月から大洲小学校に赴任致しました。

3人の子どもを産み育て、同居して舅姑その親の3人を看取りました。目下、孫4人の子育てにも駆り出されております。

この紙面をお借りして、私の思うところを少しずつお知らせいたします。

それが、保護者の皆様の今後の子育ての道しるべになれば幸いです。



答え合わせは20年後

初めて我が子を腕に抱いたとき、私は、「ゆるされた」と感じました。

大げさな言い方ですが、取り柄のない私のDNAでも人類の流れの中に加わってもよいよ、と、何か大きな存在から許されたと感じたのです。まだ若かった私は、すやすや眠る赤ん坊を、命を賭けて守ろう、この子の幸せのために力を尽くそう、と決意してしまいました。保護者の方々も、多かれ少なかれ、そういう気持ちで我が子を抱いたのではないのでしょうか。

その子にとって、何が幸せなのだろう、と考えると、社会のルールを守り、社会の中で人様に嫌われずに生きることだと思いました。人が何をどう思うか、なんてわかりません。社会に交じっていくためには、とりあえず礼儀だろうと思いました。そのせいで、我が子に対する「しつけ」は厳しかった、と思います。

子どもは、ごく幼い内は、素直に言いつけをきいてくれました。

ところが、思春期を迎えた頃、状況は変わりました。

たぶん、親が押さえつけていた子どもの自我が、ちょうど、雪を耐えていた木の枝が雪を振り払おうとするように反発したのでしょう。

それから、我が子と私のバトルの日々でした。

こちらにしてみれば、我が子をいじめる気持ちなどサラサラなく、ただただ良かれと思ってしたことだったのですが、子どもにしてみれば、理不尽な制限。よそのおうちで許されていることが、どうして我が家では許されないのか、という思いだったのでしょう。

中学時代は、校則破りの常習犯。学校からの呼び出しに、母としては自分を責めて泣きました。

心理を学んだ今になって考えれば、私は「子どもをきちんと育てなくてはならない」という使命感だけで、しつけをしてしまいました。その前段階の、「抱きしめる」、「子どもの言葉に耳を傾ける」、「共感する」という、いわば大事な愛着形成の手順を飛ばしてしまっていたのだと思います。

私は為す術もなく、おろおろしていただけですが、幸い、子どもの方が成長してくれました。私があのときどうしてあんなに厳しい態度をとったのかを、ちゃんと理解できるようになってくれました。

就職した子から電話で「お母さん、ありがとう。あれだけきちんとしつけてくれたから、今日、上司から『君の言葉遣いは礼儀正しくてすばらしい』と褒められた。」と言われた日、またもや私は泣いてしまいました。

しつけは、親の大事な仕事です。

けれど、子どもを抱きしめてあげるのも、親にしかできません。

厳しさと優しさの兼ね合いは、本当に難しいのですが、子どもがいつまでも覚えているのは、間違いなく、親のぬくもりです。

私でさえ、母の手や父の背中のぬくもりを覚えています。

間違いなくそれが、進む方向を示してくれたり、迷う背中を後押ししたりしてくれました。



*子育てについて、モヤモヤがございましたら、いつでも話においでください。お待ちしております。